

センバツ高校野球出場校が決定！

1964年大会を振り返って

日本メディカルスポーツ協会・林諄代表理事

第94回センバツ高校野球大会は出場32校が決まり、史上最も早い3月18日に幕を開けます。高校球児にとって甲子園は今も昔もあこがれの舞台。日本メディカルスポーツ協会の林諄代表理事は今から58年前の1964年、新聞記者(当時)として同年の第36回センバツ高校野球大会取材しました。戦後復興の象徴となる東京五輪開催を10月に控え、開会式で五輪旗が入場行進した同大会の思い出を振り返ってもらいました。

——決勝は海南(徳島)と尾道商(広島)という史上初めて、初出場校同士の顔合わせとなり、注目を集めました。

◆バックネット裏の記者席で取材しました。全国紙なら、地方支局から来ている特派員は自分が担当する高校が負けると地元を引き揚げるのですが、開催地の新聞社だったこともあり、決勝までいられたのでしょうか。徳島海南が尾崎正司(後に将司と改名)、尾道商は小川邦和の両エースの活躍で決勝に駒を進めました。

——尾道商が先制しましたが、徳島海南が終盤に逆転。最後まで目が離せない好ゲームとなりました。

◆強く印象に残っているのは徳島海南が1点リードして迎えた九回の攻防です。徳島海南の選手は勝利を目前にして硬くなったのでしょうか。エラーを連発して大ピンチを迎えました。特に、何でもない凡フライを一塁手が落球した時はマウンド上の尾崎投手がいらだっているような仕草を見せ、私は「これは、あかん」と思いました。しかし、そこから尾崎投手が何とか踏ん張って後続を断ち、徳島海南が初優勝しました。

——尾崎、小川両投手ともにプロ野球に進みました。その後、尾崎選手は「ジャンボ尾崎」の愛称でプロゴルファーとして大成します。

◆西鉄ライオンズ(現埼玉西武ライオンズ)に入ったジャンボ尾崎は同学年のチームメイト、池永正明投手のピッチングを見てレベルの違いに驚いたんですね。「自分はプロではなかなか厳しいぞ」と。そんなとき、プロゴルファーへの転向を勧めた一人が先輩の鉄人・稲尾和久なんです。これについては後日談がありましてね。ある日、私が千葉県習志野カントリーにツアーを見に行った時のことです。プレーするジャンボ尾崎を見て、高校時代の雄姿を懐かしく思い出しました。その時、ジャンボ尾崎のキャディーを務めていたのが、あのセンバツ決勝でエラーをした一塁手だったんですよ(笑)。